

とも相乗していた。

金原は傅抱石から「東洋画論之権威者」と遇された。競合する学究には東京帝国大学の瀧精一（1873-1945）、その薫陶を受けた澤村専太郎（1884-1930）ほかが知られる。旧制三高寮歌「紅萌ゆる」を作詞した澤村は、アジヤンター石窟寺院の模写調査にも従事した。京都では富岡鉄斎の息・謙蔵（1873-1918）も中国絵画研究に邁進したが夭折し、次の世代の伊勢専一郎（1891-1945）が『支那の絵画』（1922）などでリップスらの感情移入美学と気韻生動との優劣を比較している。塚本麿充はここに世代交代を捉える。瀧や金原らが先駆者の末裔ならば、澤村や伊勢は美術史学専攻で養成された第一世代だった。『三太郎の日記』で人気を博した阿部次郎（1883-1959）から三木清（1897-1945）に至る系譜とも重なるが、この世代は、膨大な著述を残している。第一次大戦の戦後不況から「大学は出たけれど」の昭和恐慌に至る時期。就職難と出版界の隆盛とが裏腹に交錯していた。大正教養主義の背景をなすそうした社会史的文化土壌は、竹内洋『教養派知識人の運命』（2018）が発掘している。

そこに、一次大戦後の中国からの留学生到来の時期が重なった。日清・日露戦後の時期に続く、この第2の日本留学ブームは、谷崎潤一郎（1886-1965）、芥川龍之介（1892-1927）、佐藤春夫（1892-1964）らの支那趣味とも表裏をなし、「東洋意識」の覚醒を促していた。

＊『帝国美術大学の誕生 金原省吾とその同志たち』武蔵野美術学校90周年記念。併せて一次資料の展示（2019年10月14日－11月9日）およびシンポジウムが開催された。朴亨國編集の記念刊行物は、一次資料調査に立脚した611頁に及ぶ充実した報告論集である。

連載204 金原省吾と傅抱石 帝国美術学校の沿革と中国美術留学生の周辺

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授・
放送大学客員教授
稲賀繁美

金原省吾（きんばらせいご）と傅抱石（ふほうせき）についても、知る人は限られよう。金原省吾（1888-1958）は現在の武蔵野美術大学の前身、帝国美術学校創立の中心人物の一人、傅抱石（1904-1965）は、北京の人民大会堂の壁面を飾る長白山の雄大な風景画で著名な、人民中国初期を代表する画家である。その傅抱石は金原による中国絵画史の著作に感銘を受け、直接教を乞うべく、武蔵野に留学した。1934年4月に来日した傅は翌年7月まで滞在する。35年4月に傅は早稲田大学東瀛閣で個展の前祝いの会を開くが、その出品作『鶏図』には、折から亡命中だった郭沫若（1892-1978）が賛を寄せている。郭もまた現代中国の書家として著名であり、北京駅の屋上表札や中国銀行の揮毫でも知られる。

傅抱石は来日以前に目にしていた金原の『唐代の絵画』（1930）、『宋代の絵画』（1931）をあわせて『唐宋之絵画』（1935）として翻訳した。その序文で傅はこう述懐する。中国絵画の「六法」すなわち、伝意模写から気韻生動にいたる法則の論理的理解に苦しんでいたところ、金原の著作に接し、その科学的な演繹方法によって蒙を開かれた、と。色彩が線を導き、やがてその線が消滅して南画に至る。その歴史的経緯の理路を、金原は、骨法から形似さらには気韻にいたる自己展開として把握する。それは当時であって斬新な概観だった。

従来の中国画論は先行典籍からの引用を旨とする「集注」が定番だった。金原の議論はそれとは異なる学術範型だが、そこにはゲルマン語圏で唱えられていた「名前なき美術史」、すなわち巨匠の系譜としての画人伝から脱皮しようとする学術動向も反映している。それに依って東洋絵画史記述を刷新しようとする機運は、折からの南画流行